

近代沖縄の芸術研究①

— 末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎 —

栗 国 恭 子

はじめに

近代沖縄の芸術研究はどのようなものであったのか、その研究様相は十分に把握されているとはいえない。近代の芸術研究は多いとはいえないが、真境名安興や末吉安恭、比嘉朝健などが残した研究成果についても研究整理されていない現状である。こうした研究状況の中で鎌倉芳太郎の遺した芸術研究及び芸術資料は、整理され研究も増えてきた（原田 1999、久貝 2003など）。鎌倉と交流のあった末吉安恭や比嘉朝健の芸術研究に触れる事は、鎌倉の芸術研究の独自性をする手がかりにもなるばかりでなく、近代にどのような人物によってどのような芸術研究がなされていたのかを整理する重要な作業と考える。

今回は鎌倉芳太郎と末吉安恭（麦門冬）との交流の中から、近代沖縄における芸術研究がどのような状況であったのかを整理したい。

1. 末吉安恭（麦門冬）の人となり

1) 博覧強記な個性

末吉安恭は、1886（明治19）年5月、首里儀保村の士族の家に生まれている。門中は毛氏。祖父は安扶（末吉親方・領地：西原間切末吉村）、父の安由（里之子親雲上）は系図座勤め（明治6年『琉球藩雜記』）。又、父方の祖父：幾つかの組み踊りを創作したとされる摩文仁安祥（毛朝綱）がいる。代々学者気質の系統の末吉家蔵書には、漢学関係をはじめとするかなりの書物があった。この蔵書は学者肌の祖父、父から引き継がれた蔵書を含め、約四千冊程ともいわれる程、当時としては膨大な量であった。『球陽』や「家譜」等の郷土史料は勿論、孔子等の中国思想の書物、『日本及日本人』等の中央から発行される総合雑誌、『万葉集』、『平家物語』等の和本、民俗学関係の出版物、朝鮮の小説集等の様々な時代とジャンルの本が集められた（首里市図書館の目録に蔵書の寄贈記事あり）。後にこれ

らの書物は、当時伊波普猷が館長を務める県立沖縄図書館郷土史料室にも寄贈されており、史料充実に貢献したといわれている。

伊波は、「私が蒐集した琉球史料を最もよく利用した人の一人」で「沖縄史鑑賞家としては沖縄一」だと末吉安恭を評する。

個性的、その上に博覧強記と呼ばれる人達が存在する。見る側の視点の角度によって様々な顔を見せてくれる。こちらの視点は、あたかもプリズムを通り抜ける光のように屈折してしまう。その人の人生を語る事を躊躇させる存在がある。その全体像は臆気で、語り尽くしたと思ったその瞬間に、本当は何もその人について語って等しいと思わせてしまう一つの個性。漠漠としているが強烈というかなり矛盾に満ちた個性である。

明治末から大正にかけて活躍したジャーナリスト・末吉安恭もそういった種類の個性をもった人物である。当時の新聞や雑誌に多くの歴史・民俗論考やエッセー、小説、戯曲、俳句を発表し言論の場で活躍した人である。職業人としては、①1911（明治44）～1914（大正3）5月頃『沖縄毎日新聞記者』、②1914（大正3）年6月2日～1915（大正4）年10月3日『琉球新報』記者、③1915（大正4）年11月10日～1918（大正7）年春『沖縄朝日新聞』記者、④1919（大正8）年5月～1920（大正9）年夏ごろ『沖縄時事新報』記者、⑤1920（大正9）年12月～1924（大正13）年11月25日ごろ死亡『沖縄タイムス』主筆（沖縄時事新報を改題。現沖縄タイムスとは別）とその生涯を〈新聞記者〉で生涯を閉じている。こうして見れば新聞人の何者でもない。しかし新聞人の枠だけでは彼を語れない。俳人の顔がある。小説家の顔がある。郷土史家の顔がある。明治・大正期には、新聞記者だけではなく、知識人の多くが政治的な社会改革を志し、啓蒙活動の要素を強めながらその筆を執り、新聞紙面を通して主張を展開した。それは社会が要求した新聞の大きな役割でもあった。太田朝敷、当真重慎等のように当初は新聞記者を勤め、後にその発言の場を政治の舞台に移行していった人物達も少なくはない。

このような言論の場にながら末吉安恭（安恭）は、直接的な政治的言論を展開する記事を多くは残していない。淡々と文化的な記事を書いている。彼の筆は政治を多く語らない。新聞記者として過ごした15年間の時間から見れば、新聞紙面の文化欄の充実に向き合い、そのために筆を走らせともいえる。このような末吉

麦門冬とジャーナリズムの関わり合いを見ると、明治・大正期における言論に携わる沖縄知識人中、特異な存在であることには違いない。

彼の視点は、俳句や短歌等の詩歌、歴史、民俗、絵画、芸能、言語、戯曲、隨筆、紀行文と人文・社会科学の幅広い分野に注がれている。こうした彼の論考発表の場は、基本的には沖縄地元の新聞である。しかし中央で刊行されている雑誌（『日本及日本人』、『太陽』、『人類学雑誌』など）にも盛んに投稿し、評価される。

安恭の気質は、学者肌の祖父や父からの影響で漢学の才にも優れており漢学、詩作、芸能、絵画鑑賞等の素養を重視する伝統的な首里士族教養の世界ともいえる。琉球文化にかかわらずこのような漢学、詩作、芸能、絵画鑑賞等の美術的知識や感性を育くむ環境は、首里生まれの麦門冬にとって身近なものであった。こうした首里士族の持つ伝統的な教養の世界の影響は、後に麦門冬の文筆活動が織り成す、幅広い視点への確固たる基礎を培ったといえよう。そして、幼き頃より無類の読書家であった個人的な資質が拍車をかけ、明治期の急激に変化する沖縄社会の中で成長し、中央で次々と生まれてくる新しい思想や価値観を追い掛けた。アカデミックな場で教育を受けていない麦門冬にとっての知的作業は、そうした基礎の世界を、時代に即して、よりしなやかに豊かに増殖させていく作業であったに違いない

安恭の言論活動は、分野も文学（俳句・小説・評論）芸能、歴史研究、民俗研究と幅広いが、10以上のペンネームを用いることも特徴的である。「俳句は麦門冬、川柳は猿族、短歌およびそれに関する文章は落紅か落生、漢詩が猿夢、又は莫夢山人、狂詩は猿夢老、翻訳（中国・朝鮮小説翻訳・補足著者）を襄哉、そして散文については麦門冬をはじめとして麦、麦生、莫夢、莫夢道人、BS生、B生と自由に使用している。」（伊佐眞一「末吉麦門冬と新聞」）彼の幅広い分野に注がれた思考、その思考の材料となる資料もある意味では〈枠〉をもたない自由さがある。こうした彼の個性と、ペンネームの多さ、発表論考がまとまった著書として刊行されないまま、その活動を若い時期に終了してしまう事情から、広く知られた人物とは言い難い（末吉の発表論考については新城1984、栗国1991が詳しい）。

2) 友人達の安恭像

末吉家を訪問した友人達は、その読書趣味に挙って驚きを示した。その書齋は

八畳の内畳一枚半程のスペースを除いては、あらゆる分野の蔵書で埋もれていた。又、中央の雑誌等で活躍している若き文人・麦門冬に、色の白い優男（やさおとこ）のイメージを抱いて訪問した人々は、五分苳りの頭に大きく逞しい体で、始終ニコニコとして好きのする性格の人物が、この書齋の主人であることにも驚きの色を隠さなかった（『琉球新報』明治42年5月17日）。大正13年11月末、突然に38歳の若さでなくなった末吉安恭を友人達は、どのように見ていたのだろうか。

民俗学者の折口信夫は、沖縄を1921（大正10年）の夏と1923（大正12）年の夏、1935年から翌年にかけて、来沖と三度にわたって訪れた。一度目の来沖は、その年柳田の沖縄訪問（いわゆる『海南小記』の旅である）に影響を受けたものであった。研究会や自宅を訪問すると柳田の熱のこもった口調で沖縄の話が次々と語られる。以前から少なからず関心を持っていた沖縄の話を聞いているうちに、折口の中で沖縄への興味は押さえられないものとなり、沖縄へ旅行を決心し海を渡ったのである。二度目の来沖は、大正12年（1923）の夏である。その際に見聞した内容は、日記（ノート）風の文章で「沖縄探訪記」（『折口信夫全集十六集』中央公論社）としてまとめられている。この折口が離島を含む沖縄の各地を精力的に見学している。二回目の探訪旅行では、国頭方面で宮城聡、島袋源七、その他首里・那覇を中心した中南部では、主として川平朝令が案内、島袋源一郎・末吉麦門冬・魚住惇吉など多くの地元の人達が、調査に同行し折口に助力している。末吉らから琉球王国のこと、王家の信仰のこと、沖縄の祭祀組織のこと、琉球史料のこと等がとめどなく語られたことであろう。そしてその話一つ一つは折口の中に溶け込んでいった。折口は、麦門冬のことを「末吉安恭は、才能と、善良とを持って不慮の事に逝いた。思へば、この人にあうたこと、前後二度を越えないであろう。その後、十四年を経て、其のよい印象は、島の誰の上よりも深く残った」という程、印象に残った人物であつたらしい。また「東京へ引き出しても、不覚はとらなかつたはずの琉球学者末吉安恭さんは、島の旧伝承の生きた大きな庫であつた」（「若水の話」）と述べている。歴史や民俗の話だけではなく琉球の芸能に関しても造詣の深い麦門冬（安恭）は、折口と同じように俳句や短歌をたしなむ文学者でもあつた。こうした面からも折口の麦門冬への評価は非常に高いものである。折口は、昭和3年（1928）伊波普猷が『琉球戯曲集』を出した時、折口は「組踊り以前」を巻頭に寄せた。その中で1924（大正13）年に不慮の死を遂げ

た麦門冬を「南島第一の軟琉文学・風俗史の組織者」（「組み踊り以前」と表現したのである。

南方熊楠は、和歌山県出身で、人類学・民俗学から粘菌観察など、幅広い博物学的な知識とその強烈な個性を持ち、その知の在り方が見直されている人物である。大正7年頃から雑誌『日本及び日本人』や書簡で交流した末吉のことを「末吉安恭君は純粹の琉球人だが、博く和漢の学に通ぜること驚くべく、麦生なる仮号をもて『日本及び日本人』へ毎度ださる考証、実に内地人を凌駕するもの多し。」（「出産と蟹」とその博識ぶりを感嘆している。

麦門冬（安恭）と南方熊楠が、博覧強記の個性を持つ同様なタイプの知識人であるという指摘は、1924（大正13）年に、東恩納寛惇の「野人麦門冬の印象」の中で既にされている。麦門冬を「―「日本人」のカットに小出しに随筆を出していた者に、南紀の奇人南方翁と麦門冬とがあった。麦門冬は果たして彼と同一人か。彼れは沖縄のような不便な処にいて、珍しい程、物を読んでいた。読んだものを並べて行く点に於いて、彼は球陽の小南方であった。」と表現している。「麦門冬に対する自分の印象は、向日葵を連想させる。黙々として垣根の裏に力強く咲いている花、輪郭の大きいぽとした花、満州や蒙古の荒原にでも咲きそうな花。併しながら彼は遂に床の間の飾りとはならなかったのである。一幕の陰に初めからいた人のように感じた。声こそ立てね、彼は品物を持って最初から店を出していたのである。一彼の生涯は障子の陰を通った大人のような気がする。素通りではあったが影は大きかった。開けて見るともういない。」（東恩納寛惇「野人麦門冬の印象」）

2. 末吉安恭の文化観―近代沖縄文化研究の一翼―

琉球文化の研究において郷土を表現することに対する末吉安恭の態度は、1910（明治43）年頃から明確で以後変わることはない。当時24歳の麦門冬は、琉球的な俳句創作を試みる友人へ「（君には）琉球固有の血がみなぎっているであろう。琉球人として琉球の自然・人事を君の先祖の伝来の血で混化して更に君の個性化して歌うべき」と提言している。文学を志す後輩の池宮城績宝が「郷土文学叢書」を発行する事業に取り組んだ際にも、自らの生命を育んだ自然・生活・歴史環境の美しさや醜悪さすべてを受け入れ、それらを肩肘張らずに素直に表現でき

ること、そしてその中に滲み出る琉球人としての個性と感性、そして一人の表現者としての個性を大切にすることの重要性を説いている（大正13年3月21日『沖繩タイムス』）。ありのままのを受け入れ表現するスタンスこそが、文化に対する理解だと認識していた。そうした姿勢は、突き詰めれば、時代や地域や立場や分野からの優劣の意味を発生させないのである。こうした自らの文化に向き合う姿勢は、他者の文化を理解する場合にも同じように尊重されなければならない。

文学批評分野での発言だけではなく、琉球を素材に表現された美術作品を鑑賞する際にも、麦門冬は同じような視点を徹底して持ち続けている。

沖繩県人が、外来者に対して「沖繩文化への正しい理解」を願う際に、紹介する側とされる側の姿勢が同じ視点の場で語られること以外は、麦門冬にとって意味をなさないのである。文化が相対化出来ること、それは個性を認める事が出来るということである。個の持つ意味を理解出来るということである。麦門冬は、沖繩に興味を持った鎌倉、折口、南方などの研究者や横山健堂（大正2年来沖）などのジャーナリストの中でも、特別な先入観なく沖繩の文化に接することが出来る可能性のある存在に対しては、惜しみもなく史料紹介が出来、喜んで沖繩を語れるのだ。文学は勿論、俳句や絵画を通して彼が「琉球（沖繩）」を素材にした表現に接する際、表現に気負いのあり沖繩の特徴を誇張した作品に対し冷静に厳しく批判的な批評するのは、こうした文化への姿勢からくるものであった。例えば、画家・山口瑞雨の「琉球王」と題された作品に描かれた王や従者の表情を観て「支那人に琉球の衣冠を着けたようなものである。琉球人の性格がちっとも出て居なかった。一輪郭を画いて内容を書くを知らず。形外に泥して精神を捉ることを知らない。一十年間も琉球に居て親しく琉球人を見て居る作者の筆とも思われぬ一人形を画いたに過ぎない。作者が琉球を目ざす以上はもっと深く強く琉球人の歴史、民情、個性を研究してから筆を執らねばならなかつた。」と手厳しい評価をしている（1912年9月『沖繩タイムス』）。

醜悪さや欠点までも受け入れる自己肯定の立場を取り、地域や個人のレベルにおいても、個性を尊重しなければならぬとする主張を持って文化に向き合う麦門冬の姿勢は、時代が育んだ新しい視点の流れでもあった。言い換えると、麦門冬の郷土を捉える視点の中には、デモクラシー運動が展開された時代の表現者・言論人らしい志向が、しなやかに取り込まれている。

この時期、文学・思想界に新鮮な衝撃を与えた言論が登場した。武者小路実篤、志賀直哉によって1910（明治43）年に創刊された雑誌『白樺』派の主張する、自然、つまり存りのままの人間性を積極的に肯定した立場である。その影響を受けた文学界、演劇界等の芸術活動は個性や自立をテーマに表現した作品を次々に生み出し、一世を風靡した。

かつて沖縄を離れて上京し、異郷の地で暮らした時代に、沖縄出身者の姿を見て醜汚な感じに捕われ、その者から逃れるためにわざわざ道を変えたい気持ちを実感として抱いたと麦門冬は回想する。誇り高き若さゆえ、沖縄人の存在に醜悪さを感じ、ある意味で屈折した自己否定を経験した時期を過ごした麦門冬が、逃れられないものとして郷土のすべてを受け入れる事が重要だと説くようになる。沖縄の個性の価値を認めるようになっていく。その変化の過程には、デモクラシーの思想とその盛り上がりをもせた大正という時代性が、少なからず影響を与えている。この傾向は麦門冬に限らず、同時期を生きた他の言論人達にも指摘できよう。大正時代の麦門冬は、沖縄の歴史や文化に関する文章を精力的に発表し、沖縄に関心を示す研究者や訪問者に沖縄を紹介する役目を喜んで引き受けていく。

末吉が琉球の絵師についてふれた最初の文章は、1917（大正6）年に『沖縄新公論』第1巻第4号～第6号紙面で発表した「画聖自了」である。家譜を資料にした紹介文であった。文章の形では残さぬものの1916（大正5）年3月には友人の小橋川（南村）、山田真山とともに「自了と殷元良」について調査のために赤平町の玉城家を訪ねている（『琉球新報』大正5年3月5日）。1922（大正11）年春、麦門冬は美術史論考「琉球画人伝」を、主筆を務める『沖縄タイムス』紙（沖縄時事新報を改題し大正9年に創刊。現在の『沖縄タイムス』とは別）に連載した。一ヵ月余り連載されたこの記事（現在原文の確認は出来ない）は、琉球王府の絵師・長嶺宗恭（華国）の「琉球歴代画人表」を元資料に書かれた優れた論文であった。その連載が、東京美術学校図画師範科を卒業（大正10年）し、沖縄県の師範学校に赴任していた鎌倉芳太郎の目に止まった。琉球の美術に興味を持っていた鎌倉は、沖縄タイムス社協に居を構えていた麦門冬の書齋を訪れた。「ヤマトウンチュウの教諭が、沖縄の文化に興味を持ってくれるのは嬉しい」と言って、麦門冬は分厚い手を出して握手して歓迎した。鎌倉芳太郎の聞き取り調査に必要な人物に紹介状を快く書き、琉球美術資料の調査に必要な写真撮影の為

に良いカメラを持っている親戚（小橋川朝重）を紹介した。鎌倉は、麦門冬のこうした協力を「肉親も及ばない親切的な配慮」とし、「稀に見る人格者」で「末吉安恭（麦門冬）こそこの研究のための恩人である」と回想している。その時の麦門冬との交流をきっかけにして、後年鎌倉は「琉球絵画の系譜」の論文を世に出した。論文では、麦門冬の論考「琉球画人伝」も細かに紹介されており、自了、呉師虔、殷元良、向元瑚、毛長禧等、鎌倉が五大家と呼ぶ琉球王府画家の他にも多くの画家を確認できる。

1924（大正13）年4月に鎌倉芳太郎は、伊東忠太と共同名義で財団法人啓明会より琉球芸術調査のため補助を受け、琉球美術史研究を極めていく。鎌倉の貴重な研究成果は『沖縄文化の遺宝』（「琉球絵画の系譜」収録、1982年、岩波書店）を通して私達は触れる事が出来る。

3. 鎌倉と安恭—二人の交流時期—

末吉安恭と鎌倉芳太郎の交流は、鎌倉が沖縄県女子師範学校・沖縄県第一高等女学校教諭として沖縄に滞在した時期の1921（大正10）年5月から1923（大正12）年3月の1年10ヶ月の間と短いものであった。厳密に言えば、新聞紙面で安恭の記事を読み、鎌倉が安恭を訪問したとする大正11年春からの1年程になる。

その後、大正13年5月に第1回琉球芸術調査で再び来沖し、安恭の亡くなる11月末までの半年間が2人の交流時期になる。鎌倉による沖縄調査をその調査方法と調査内容から〈前期〉〈中期〉〈後期〉の三期に分けた（原田 1999）、〈前期〉に相当する段階に二人の交流のすべてがある。

鎌倉が1921（大正10）年に来沖した時期は、安恭（36歳）は沖縄タイムス主筆として活躍しており、大正6年頃から始めた「地理歴史談話会」や大正11年に発足した「史跡保存会」の組織を通して真境名安興らと文化活動に取り組みながら、新聞紙面では「おもろ草紙の消失」（大正11年3月30日）、「首里城の回録」（大正11年3月31日）、「火災と文献」（大正11年4月1日）などの記事で毎日のように歴史資料や文化財保存の価値を表現している（栗国 1991）。

鎌倉は「一学究的ではあったがその資質は芸術家で、特に造形芸術には深い関心を持ち、琉球文化の研究者として知られ。」ており「伊波普猷、真境名安興、末吉安恭、三氏を〈琉球学者の三羽鳥〉と呼んでいた」（鎌倉『沖縄文化の遺宝』

167 p) と当時の沖縄における文化研究者の安恭を位置づけている。

二人の交流は、大正11年の春ごろに新聞紙面連載されていた末吉の「琉球画人伝」を見た鎌倉が自らの研究資料として筆写し、その後直接末吉の元を訪問したことに始まる。当時の鎌倉は「将来私がかような論文を書こう等とはその頃考えてもいなかったからである。」(『沖縄文化の遺宝』P167) と自ら述べるように、琉球芸術の論考を後世残すようになるとは思ってもいない。当時の鎌倉は、沖縄芸術文化を貧欲に吸収しようとする姿勢が主たるもので、大和の古寺につながる造形つまり日本の「天平時代以前の古代芸術研究」における資料の発掘に主眼のあった時期である。「琉球芸術」をテーマにした独自の研究成果を求めている立ち様ではなかった。その訪問のきっかけは、地元の郷土研究家に連載についての質問と情報を提供してもらうための挨拶程度の訪問ではなかったかと予想される。しかし、先にも述べたように末吉は惜しげもなく鎌倉の調査協力をおしまず、鎌倉へいろいろな人を紹介している。鎌倉の前期琉球芸術調査(沖縄県女子師範学校教員時代から大正13年5月から大正14年5月に行われた第1回琉球芸術調査期)の際のフィールドノート([23] から [28])を検討した原田は、鎌倉が末吉を訪ねた時期は、鎌倉の回想する大正11年春ではなく、大正11年8月以降だと推測している(原田 1999)。

沖縄タイムス社(那覇区松山1-12)脇の自宅書齋を訪問した当時の様子を鎌倉は次のように述べる。

「安恭は「ヤマトウチユウ」である師範学校の教諭が沖縄の文化に興味を持って呉れるのは嬉しい」といって、分厚い手を出して握手して呉れ、新聞に掲載した「琉球画人伝」について質問したところ、「あれは長嶺華国翁の原案によって書いた、同翁を訪ねて色々聴いて欲しい」といって早速紹介状を認めてくれた。新聞紙上に月余に亘って発表した論説に対し、その原拠を明かすということは、普通の場合しないのが通例の人間感情であるのに、この人はその老画家華国を私に紹介して呉れた。この末吉安恭こそ稀に見る人格者であろうと思った。しかしこのようなことは相次いで訪問し示教を乞うた伊波普猷、真境名安興にも見られ—中略—それからの末吉は肉親も及ばない親切な配慮をもって私を引き回して呉れた。その一例であるが、後に写真撮影のためにその縁戚の小橋川朝重を紹介して呉れ、小橋川は当時五十歳位、米国から帰朝して

遊んでおられ、良いレンズの写真機を持っておられたので、この人もまた利益を度外視して、末吉に頼まれたからと言って親身になって私を援助して呉れた。若しも末吉と相合わなかったならば、私とその後の調査研究に進み得たかどうか。末吉安恭こそこの研究のための恩人であることをここに記して置く。（『首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜』『沖縄文化の遺宝』）

繊細で感受性の強い鎌倉にとって、沖縄での芸術理解のために尽力をつくした末吉の存在は小さいものではない。1898（明治31）年生まれで、安恭に12歳年下の若き鎌倉にとって沖縄に教員として滞在した時期の「琉球芸術理解への導き手」の一人として末吉は位置づけられる。安恭は、本土出身の若き研究者の琉球芸術研究を〈期待〉とともに暖かく〈見守る〉役割を果たしている。1922（大正11）年8月22日には、末吉の紹介状を持ち長嶺華国・宗恭（60歳）を首里儀保町の私邸に訪問調査している。こうして鎌倉の琉球芸術における絵師研究調査が本格的にはじまるのである。大正11年秋には、鎌倉が那覇市にある天久権現宮を調査した際に、その御神体の「本宮阿弥陀」と「新宮薬師如来」の二枚の丸い板絵の仏画を確認し、貴重資料が盗難にあわぬよう末吉麦門冬と相談し、県庁の神社課を通じて末吉の友人・伊波普猷が館長を務める沖縄図書館に保管している。鎌倉と安恭の交流エピソードの1つである（『沖縄文化の遺宝』）。

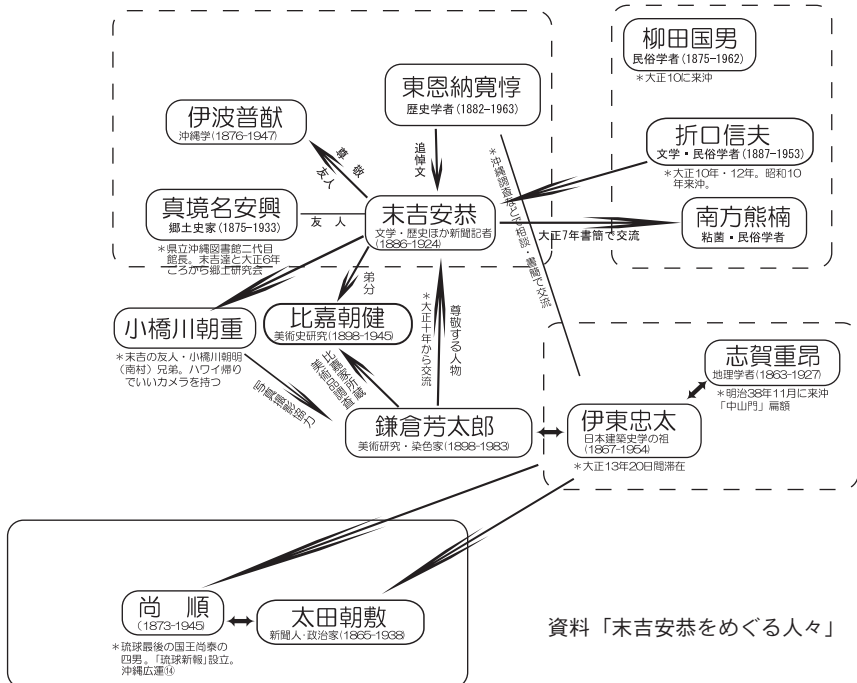
当時の二人の関係が顕著に表れる資料が、八重山調査の際に書かれた原稿である。鎌倉は、1923（大正12）年2月10日～3月7日の時期に宮古・石垣島調査（調査の詳しい内容は原田 1999）を行ない、その成果を「先嶋芸術と桃林寺の印象」の論考にまとめている。興味深いのは、『沖縄タイムス』紙面には「先嶋芸術と桃林寺の印象」と題した鎌倉の記事が掲載されていることだ。タイムス主筆の安恭に八重山調査をまとめた手紙（3月11日に書かれた）が届き、安恭の判断で掲載された可能性が高い。その書簡下書きには「愛と涙にぬれたる心のパトロンなる末吉安恭様」との表現も確認出来る。現在、石垣市立八重山博物館に残された原稿には、その冒頭部分に「この貧しき一篇を草して麦門冬末吉安恭氏に捧ぐ」と書かれており表題も「先嶋紀行と桃林寺の芸術（一）」とあり、その後表題を変えたことがわかる。八重山からの調査の帰り3月7日午前8時半に那覇港へ到着した鎌倉は、その日の内に安恭宅へ出向き、八重山での調査の成果を末吉に熱く語っている。

船旅で疲れても夢中で話す鎌倉に安恭は「この写真はだれですか？」からはじまり、同門の毛氏宮良安宣氏についても質問したり、鎌倉のテーマに「尚真王以前の結論が出ましたね」といってコメントをしている。嬉しそうに聞き入る末吉の様子を鎌倉は、論考の中で述べている。この原稿は推敲され、後の1974年に『八重山文化』2号に掲載された「先嶋芸術と桃林寺の印象」では、「この貧しき一篇を草して麦門冬末吉安恭氏に捧ぐ」の一文は省かれているが、その遺稿から推し量るに当時の鎌倉が、少なからず末吉を慕っていたことが伝わってくる。また、鎌倉は新しい調査成果をふまえて1924（大正13）年2月28日～4月12日の間45回にわたって「八重山芸術の世界的評価近代芸術に於たる新しき指針」を『沖縄タイムス』で掲載をする事で主筆の安恭とつながりをもっている。この時期の鎌倉の琉球美術に関する認識の変遷と美術観を検討しその中で八重山調査について原田は、「鎌倉の造形物に関する実地調査は、八重山調査を境に格段に内容の濃いもの」となっており「特に実地調査に伴う写真撮影を本格的に始めた」のは八重山調査以後であると指摘し、鎌倉が琉球の造形研究において「視覚的伝達力」のすぐれた「写真」を取り入れた時期と述べる。（1999）

また、後年になって二人の出会いのきっかけになった末吉の「琉球画人伝」について鎌倉は「末吉安恭が『沖縄タイムス』紙に発表した「琉球画人伝」は、前記の華国原案の資料に準拠しながらも、これを文化史的時代背景の中で捉えようとした跡が見られ、従って一応「琉球絵画史」の体裁を整えるに至っている。」とも評価している。二人の交流の途絶えてから約60年の月日が流れ、1982年に刊行された鎌倉芳太郎の『沖縄文化の遺宝』の「首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜」中で細かく末吉論考の構成を紹介している。しかし、末吉安恭論考の発表の中心となった地元新聞資料が、大正8年から昭和10年間の新聞資料がすべて残っているわけではない。この時期の新聞は、断片的にしか確認することが出来ない現状からは、大正8年～大正昨年に書かれた末吉論考の全容確認はむづかしい。その時の麦門冬との交流をきっかけにして、後年鎌倉は「琉球絵画の系譜」の論文を世に出した。論文中では、麦門冬の論考「琉球画人伝」も細かに紹介されており、自了、呉師虔、殷元良、向元瑚、毛長禮等、鎌倉が五大家と呼ぶ琉球王府画家の他にも多くの画家を確認できる。こうした末吉の論考に対して鎌倉は、琉球絵画史に研究として、長嶺華国の「琉球歴代画人伝」及び末吉安恭の「琉球

画人伝」を検討し、首里尚侯爵家図書室において、各画家の『家譜』を調査記録し、また同時にその遺作を捜求撮影し、これを比較研究して見た結果、琉球王朝時代、一流の画人として挙げられるのは、次の五名であるという結論に達した。自了・欽可聖城間清豊、呉師虔・山口宗季、殷元良・座間味庸昌、向元瑚・小橋川朝安、毛長禧・佐渡山安健（「首里王府画人伝及び貝摺奉行所絵師系譜『沖縄文化の遺宝』」という独自の見解に達している。

1924（大正13）年5月～1925（大正14）年5月に鎌倉芳太郎は、伊東忠太と共同義で財団法人啓明会より琉球芸術享功のため補助を受け第一回「琉球芸術調査事業」を行い首里城、多数の建築・美術品写真撮影、尚家文書などを調査している。7月に来沖した伊東忠太と合流した鎌倉は、伊波普猷や太田朝敷らと共に末吉安恭とも交流をしている。伊東忠太の『琉球－建築文化－』（東峰書房 1942）には、沖縄の交流が述べられている。8月20日まで滞在し帰京した伊東が東恩納



寛惇に宛てた8月29日に書かれた書簡には、「彼地にては尚家尚順男、高嶺首里市長始め、真境名、末吉、太田の諸氏に非常なる御世話様に相成感謝不知所措候」とあり、交流が確認出来る（沖縄県立図書館東恩納文庫）。しかし、この調査期間中の1924（大正13）年11月下旬に末吉安恭は不慮の事故によりその生涯を終え、鎌倉の芸術研究成果に触れることはなかった。沖縄に滞在期間中に突然に訪れた「末吉の死」について、鎌倉の筆はふれることはない。しかし鎌倉の貴重な研究成果と共に、末吉の芸術研究にも『沖縄文化の遺宝』（「琉球絵画の系譜」も収録）を通して私達は触れる事が出来る。そういう意味では、近代における末吉安恭の芸術研究は、鎌倉の残したフィールドノートと鎌倉の記憶に支えられた『沖縄文化の遺宝』の中でのみ知ることの出来る、極めて特異な研究といえよう。

近代沖縄における芸術研究は、末吉安恭や鎌倉芳太郎のほか、郷土史家の真境名安興、末吉安恭の弟分的な存在の比嘉朝健らが行なっている。特に鎌倉芳太郎と同年で中央美術雑誌に多くの論考を発表した比嘉朝健に関する研究は進んでいないが、近代沖縄における芸術研究にとっては重要な存在である。

本稿は2006年度附属研究所公開講座「鎌倉芳太郎をめぐる人々、場所」シリーズの栗国担当の「鎌倉芳太郎と末吉安恭」（11月17日）をまとめたものである。同講座では「鎌倉芳太郎と比嘉朝健」（11月24日）も担当し、末吉、鎌倉、比嘉の関わりとその研究については触れた。

末吉安恭と比嘉朝健、鎌倉芳太郎と比嘉朝健の交流を通しての〈近代沖縄の芸術研究〉は、別稿（「近代沖縄の芸術研究」②）でまとめたい。

〈末吉安恭（麦門冬）関係参考文献・資料—1982年以降—〉

- 1) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（二分冊）1982、岩波書店
- 2) 仲程昌徳「末吉麦門冬」『沖縄大百科事典』中巻、1983年、沖縄タイムス社
- 3) 新城栄徳『琉文手帖 文人・末吉麦門冬—没60年—』1984、琉文
*伊波眞一「解説末吉麦門冬と新聞」と詳細目録。
- 4) 栗国恭子「末吉麦門冬と民俗学」（沖縄民俗学会9月例会発表）1991年9月
- 5) 栗国恭子「末吉安恭（麦門冬）の民俗的視点」『地域と文化第68号』1991年12月、ひるぎ社、1984年以降に見つかった大正年間の新聞から伊波眞一の目録に追加文献を紹介。2)の目録と4)あわせての文献目録、19)書簡が現

在確認出来る末吉安恭の仕事である。

- 6) 粟国恭子「末吉安恭（麦門冬）と伊波普猷」『地域と文化第72号1992年8月』ひるぎ社
- 7) 粟国恭子「国粹主義の周辺と沖縄－真境名安興の活動を中心に」『浦添市立図書館紀要No.5』1993年、浦添市教育委員会
- 8) 粟国恭子「人物列伝・沖縄言論百年－末吉麦門冬1～36」『沖縄タイムス』1994年8月11日～9月30日
- 9) 粟国恭子「南方熊楠と末吉安恭（麦門冬）の交流－『球陽』をめぐる」『地域と文化第91・92合併号』1995年2月
- 10) 粟国恭子「岡崎との交流－志賀重昂の沖縄関係目録」『浦添市立図書館紀要No.6』1995年、浦添市教育委員会
- 11) 粟国恭子「南方熊楠所蔵「球陽」調査報告」『熊楠ワークス 創刊号』1996年、南方熊楠邸保存顕彰会、7月31日発行
- 12) 粟国恭子「発見された「球陽」－南方熊楠書庫の写本」『沖縄タイムス』1996年8月5日～7日
- 13) 粟国恭子「南方熊楠と麦門冬」『文学第8巻第1号』1997年1月、岩波書店
- 14) 粟国恭子「伊波普猷と浦添と沖縄学と」『浦添市立図書館紀要No.8』1997年3月、浦添市教育委員会
- 15) 粟国恭子「伊波普猷と末吉麦門冬（安恭）の交流」『浦添市立図書館紀要No.8』1997年3月、浦添市教育委員会
- 16) 原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学』第11号 1999年、沖縄県立芸術大学附属研究所
- 17) 神坂次郎「俺は夏草麦門冬－末吉安恭－」『歴史街道』3・4・5月号 2002年、PHP研究所 ※粟国資料提供、連載は『南方熊楠の宇宙－末吉安恭との交流』2005年、四季社で刊行。
- 18) 久貝典子「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（上）」『沖縄文化』第38巻2号通巻96号 2003年、『沖縄文化』編集所
- 19) 池宮正治「南方熊楠宛 末吉安恭書簡について」『南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告』2004年、奈良女子大学人間文化研究科
- 20) 小峯和明「南方熊楠と沖縄学」『南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告』

2004年、奈良女子大学人間文化研究科

- 21) 池宮正治・崎原綾乃「南方熊楠宛 末吉安恭の書簡」『南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告』2004年、奈良女子大学人間文化研究科 * 解題：崎原綾乃
- 22) 小峯和明「熊楠と沖縄—安恭書簡と『球陽』写本をめぐる—」『国文学第50巻8号』2005年8月号、学燈社
- 23) 飯倉照平『南方熊楠』ミネルヴァ日本評伝選、2006年、ミネルヴァ書房

※1982年以前には、岡本恵徳、大城立裕、新城安善、島袋盛敏などが、文章で触れている。詳細は3) 新城、1984